

——ESP研究所のほうは今どうしているのか。

「ESP研究所とこうの6は正確でなく。正しくは、Institute for noetic sciences とする」

ノエティック・サイエンスというのは訳しにくいことばであり、ノエティックというのは、ギリシア語のノエシスからきており、純粹思惟、純粹知性の働きのいう。あえて訳語をあてれば、純粹思惟学研究所とでもなろうか。しかし、こういう訳語からは、彼がこの研究所の名前に与えた含みを理解できないだろう。

このインタビューで次第に明らかになっていくように、彼の世界観は、アリストテレスのそれにきわめてちかい。アリストテレスは、世界を、可能態たる質料が形相を求め獲得して(あるいは形相が質料を得てといてもよい)現実態に転化していくダイナミックなプロセスとして把握した。このプロセスの頂点には、完全なる現実態としての形相の形相＝純粹形相がある。この純粹形相が究極の原理(アルケー)であり、真に永遠の実体であり、万物の目的因であり、運動因でもある。すなわち、これが神である。万物は神をめざして進む。しかし神はこの万物の運動の究極点であるから、自らは不動である。自らは不動で万物を動かすから「不動の動者」と呼ばれる万物は自己がめざすべき目的としての神を思惟する。しかし神は究極の目的であるから、自己以外の目的を持たない。従って神は自己自身を思惟する「思惟の思惟」である。

万物は神にたどりつかないかぎりにおいて、すなわち可能態を残しているかぎりにおいて、神以外のものなのであり、可能態がすべて現実態になれば、そこに存在するのは神のみである。すなわち、いいかえれば、存在するもの一切は神と神の可能態である。この意味において、神は一者であると同時に一切の者である。一にして全である。質料の側から見ればダイナミックな世界も、純粹形相たる神の側から見れば、神の自己認識過程、神の自己思惟にすぎないともいえる。

こうしたアリストテレスの世界観は、さまざまのバリエーションをとめないながら、人類の思想上くり返しあらわれ続ける。ミッチェルとのインタビューもその辺のところを頭に入れておいていただくとうわかりやすいだろう。

「この研究所は、人間が持っている精神能力を総体的に研究するための機関で、ESPもその研究の一環だが、ESPだけを研究しているわけではない。私がこういう研究所を作ったのは、科学と技術はこれほど進歩したのに、それを活用する人間の叡智のほうにはまるで進歩がないために、科学技術が人類の幸せのためというより、人類に災禍をもたらすような方向に利用されつつある現状をうれえたからだ。これは、人類の叡智の発達のためにさかれているエネルギーが、科学技術の発達のためにさかれているそれにくらべてあまりに少なすぎることに原因があると思ひ、NASAをやめるときに、これからしばらくの間は、人間の精能力の研究に身を捧げようと思つたわけだ」

——ESPも人間の叡智につながる重要な精神能力だと……。
「その通り。ESPは潜在的には万人が持っている能力だ。」

ESPだけではなく、サイコ・キネシス(念力)、心霊医療、予言などといったいわゆる超能力も、人間の精神能力の一環だ。超能力のプリミティブな形態のものは、誰でも日常生活で体験しているはずだ。何かが閃くようにわかったとか、念じつづけていることが普通の確率以上で実現するとか、気の持ちようで病気が直るとか、予感とか虫の知らせとか、こういうことは誰でも経験することだ。

超能力といわれるものは、こういう日常的な人間の精神能力が特別に発達したものと違ってよい。大部分の人は足し算引き算程度の算数しかできないが、高等数学をスラスラ解く大数学者も何人かはいる。バイオリンに弓をあてれば、誰でも音は出せるが、名演奏できる巨匠はほんの少ししかない。それと同じように、そうした能力を通常人の何十倍、何百倍と発達させた超能力者が何人かはいるわけだ。

いわゆる超能力というのは、結局、人間がその環境とコミュニケーションするときに、物質的コミュニケーションだけではなく、精神的コミュニケーションもするということ、環境に働きかけるときに、物質的に働きかけるだけでなく、精神的に働きかけることもできるということを意味している」

——あなた自身もそういう能力を持っているのか。

「大したものではないが、ある程度は持っている」

——ESP、超能力の研究などというと、日本では、エセ科学扱いされていて、まともな人はほとんど相手にしないが……。

「アメリカでも似たような状況が一般には十五年前くらいまであったといえるだろう。しかし、近年大きく事情が変わって、特に若い優秀な科学者が続々この領域の研究に入ってきて

ている」

——誰でもが潜在的には超能力を持っているとして、それを誰でも開発していくことができるのか。

「基本的にはできる。しかし、あらゆる能力の開発と同じように努力と修練が必要だ。それに天分の問題もあるだろう。しかし、何より大切なのは、懐疑心を持たず確信してやることだ。できると信じなければできない。例のユリ・ゲラーのスプーン曲げの実験がテレビを通じておこなわれたとき、テレビを見ていた子供たちが同じことをやってのける例が続出して大騒ぎになるということが世界中で起きた。子供たちは、自分もできると素直に信じたからできたのだ」

——しかし、超能力者を自称する人の中にはインチキも多い。「その通りだ。真面目な研究の最大の障害がそれだ。特に心霊医療などにはインチキが多い。超能力現象の報告は数千年以前からあるが、数千年前からホンモノとニセモノが入りまじっている。それが問題を複雑にしている。ただ、超能力現象を否定しようとする人々は、インチキの例ばかりに目を向けるが、あらゆる科学的検査に耐えて、超能力現象と認定せざるをえない現象が存在することもまた事実なのだ」

——いまも超能力現象の研究に力を注いでいるのか。

「いや、私自身はここ数年それから離れている。超能力をテクニカルに求めることは誤りであることに気づいたからだ。超能力はきわめてパワフルな能力だから、面白半分にそれを扱うことは危険なのだ。それを熱心に探求するあまり、精神に異常をきたした人が昔から少なからずいる。

超能力を扱うには、まず、それにふさわしい精神の安定と

感性の安定を得ることが必要だ。心の中からあらゆる日常的世俗的雑念を払いのけ、さざ波一つない森の中の静かな沼の水面のように、心を静寂そのものに保ち、透明な安らぎを得なければならぬ。精神を完全に浄化するのだ。精神を完全に浄化すれば、とぎすまされた鋭敏な感受性を保ちながら、それが外界からいささかも乱されることがないという状態に入ることができる。仏教でいうニルヴァーナだ。そこまできけば、人間が物質的存在ではなく精神的存在であることが自然にわかる。

人間は物質レベルでは個別存在だが、精神レベルでは互いに結合されている。ESPの成立根拠はそこにある。さらに進めば、人間のみならず、世界のすべてが精神的には一体であること(spiritual oneness)がわかるだろう。超能力現象は、このスピリチュアル・ワンネスの証明なのだ。スピリチュアル・ワンネスがあるから、スピリチュアルになりきった人間は、物理的手段によらず外界とコミュニケーションできる。古代インドのウパニシャドに、神は鉱物の中では眠り、植物の中では目ざめ、動物の中では歩き、人間の中では思惟する、とある。万物の中に神がいる。だから万物はスピリチュアルには一体なのだ。しかし、神の覚醒度は万物において異なる。だから、万物の一体性はなかなか把握できない。眠れる神をも見ることができただけスピリチュアルになることができた人間にしてはじめて、この一体性を把握できる。そして、充分にスピリチュアルになりえた人間には、超能力がおのずから生まれる。

イエスのことばに、
「まず神の国を求めよ。そうすれば、

すべてはそれにとまって与えられる。」とある。まず超能力を求めてはいけない。まず、神の国を求めるべきなのだ。超能力とは、より大きな精神世界の一部であると知るべきだ」
——あなたが神というとき、それは何なのか。あなたが信じているのは、キリスト教の神なのか。

「いや、私はキリスト教の神を信じていない。キリスト教が教える人格神は存在しないと思っています。神というのは、この世界で、この宇宙で現に進行しつつある神的な(divine)プロセスを表現するために用いられていることばにすぎない」
——あなたは、はじめからクリスチャンではなかったのか。

「いや、私は熱心なクリスチャンだった。私は南部バプテストの教義は、ご承知のように、科学が教えることより、聖書に書いてあることのほうがすべて正しいという立場だ。しかし、私は一方で科学者であり、技術者だった。だから、私の人生は四十年間にわたって、科学的真理と宗教的真理の対立を何とか解消できないかと悩みつづけた人生だった。そのため、哲学や神学をずいぶん勉強したがダメだった。結局、ある日、どちらの真理も、より高次のレベルの真理を、より低次のレベルで部分的にしかつかんでいないことから対立が生じているのだと考えれば、問題はすべて解消してしまうのではないかということがわかって、悩みを脱することができた」
——しかし、ファンダメンタリストの教義と科学の間には、そんなことでは解決ができないほど深刻な対立があるのではないか。

「宗教の側には部分的真理という以上の問題がある。それ

は教団として組織化されることから生じた、真理の道の踏み外しだ。すべての宗教は偉大なスピリチュアルな真理をつかんだ指導者の教えにはじまる。しかし、信者は、その教えの本質を充分には理解しない。

各宗教の教祖となったような人々は、イエスにしても、ブツダにしても、モーゼにしても、モハメッドにしても、あるいはゾロアスターや老子にしても、みな人間の自意識の束縛から脱して、この世界のスピリチュアル・ワンネスにふれた人々なのだ。だから、彼らはみな同時に超能力者でもあった。彼らはみな奇蹟を起こした。奇蹟というのは超能力現象の別の表現だ。しかし、その教えを受けて、追隨した人々のほうは、自意識の束縛から逃れきれないために、教えられた真理をそこまでの深みにおいて把握していない。だから、指導者が世を去ると、信者集団はスピリチュアルな真理から人間的自意識の側に引き戻されてしまう。そして教団が組織され、教団全体としてますます原初の真理から離れていくことになる。教団化された既成宗教はどれをとっても、いまや真のリアリティ、スピリチュアルなリアリティから離れてしまっている。私がいう宗教的真理というのは、教団教義のことではない」

あなたはいかにして科学的真理と宗教的真理の対立を克服したのか。それは宇宙体験と関係があるのか。

「まさしくその通りだ。私は二つの真理の相剋をかかえたまま宇宙にいき、宇宙でほとんど一瞬のうちに、この長年悩みつづけた問題の解決を得た」

——それは、宇宙体験のどの部分なのか。

「宇宙から地球を見たときだ。正確に言えば、月探検を終えて、月軌道を脱し、地球に向かって帰路について間もなくだった。それまでは休みなく働きつづけており、落ち着いてものを考える暇がなかった。しかし、地球に向かう軌道に宇宙船を乗せてしまうと、これという作業しなくなり、時間的余裕ができた。

月探検の任務を無事に果し、予定通り宇宙船は地球に向かっていたので、精神的余裕もできた。落ち着いた気持で、窓からはるかかなたの地球を見た。無数の星が暗黒の中で輝き、その中に我々の地球が浮かんでいた。地球は無限の宇宙の中では一つの斑点程度にしか見えなかった。しかしそれは美しすぎるほど美しい斑点だった。それを見ながら、いつも私の頭にあった幾つかの疑問が浮かんできた。私という人間がここに存在しているのはなぜか。私の存在には意味があるのか。目的があるのか。人間は知的動物にすぎないのか。何かそれ以上のものなのか。宇宙は物質の偶然的集合にすぎないのか。宇宙や人間は創造されたのか、それとも偶然の結果として生成されたのか。我々はこれからどこにいかうとしているのか。すべては再び偶然の手の中にあるのか。それとも、何らかのマスタープランに従ってすべては動いているのか。こういうような疑問だ。

いつも、そういう疑問が頭に浮かぶたびに、ああでもない、いこうでもないと考えつづけるのだが、そのときはちがった。疑問と同時に、その答えが瞬間的に浮かんできた。問いと答えと二段階のプロセスがあったというより、すべてが一瞬のうちだったといったほうがよいだろう。それは不思議な体験

だった。宗教学でいう神秘体験とはこういうことかと思った。心理学でいうピーク体験だ。詩的に表現すれば、神の顔にこの手でふれたという感じだ。とにかく、瞬間的に真理を把握したという思いだった。

世界は有意味である。私も宇宙も偶然の産物ではありえない。すべての存在がそれぞれにその役割を担っているある神目的なプランがある。そのプランは生命の進化である。生命は目的をもって進化しつつある。個別的生命は全体の部分である。個別的生命が部分をなしている全体がある。すべては一体である。一体である全体は、完璧であり、秩序づけられており、調和しており、愛に満ちている。この全体の中で、人間は神と一体だ。自分は神と一体だ。自分は神の目論見に参与している。宇宙は創造的進化の過程にある。この一瞬一瞬が宇宙の新しい創造なのだ。進化は創造の継続である。神の思惟が、そのプロセスを動かしていく。人間の意識はその神の思惟の一部としてある。その意味において、人間の一瞬一瞬の意識の動きが、宇宙を創造しつつあるといえる。

こういうことが一瞬にしてわかり、私はたとえようもない幸福感に満たされた。それは至福の瞬間だった。神との一体感を味わっていた」

——その神というのはつまるところ何なのか。神的プロセスを表現する概念ということだが、もう少し説明するとどういうことなのか。

「神とは宇宙靈魂あるいは宇宙精神(コスミック・スピリット)であるといってもよい。宇宙知性(コスミック・インテリジェンス)といってもよい。それは一つの大きいなる思惟である。」

その思惟に従って進行しているプロセスがこの世界である。人間の意識はその思惟の一つのスペクトラムにすぎない。宇宙の本質は、物質ではなく靈的知性なのだ。この本質が神だ」——では、この肉体を持った個別的人間存在は何なのか。人は死ねばどうなるのか。

「人間というのは、自意識を持ったエゴと、普遍的靈的存在の結合体だ。前者に意識がとらわれていると、人間はちょっと上等にできた動物にすぎず、本質的には肉と骨で構成されている物質ということになる。そして、人間はあらゆる意味で有限で、宇宙に対しては無意味な存在ということになる。しかし、エゴに閉じ込められていた自意識が開かれ、後者の存在を認識すれば、人間には無限のポテンシャルがあるということがわかる。人間は限界があると思っているから限界があるのであり、与えられた環境に従属せざるをえないと思っているから従属しているのである。スピリチュアルな本質を認識すれば、無限のポテンシャルを現実化し、あらゆる環境と件を乗り越えていくことができる。」

人が死ぬとき、前者は疑いもなく死ぬ。消滅する。人間的エゴは死ぬのだ。しかし、後者は残り、そのもともとの出所である普遍的スピリットと合体する。神と一体になるのだ。後者にとっては、肉体は一時的な住み処であつたにすぎない。だから、死は一つの部屋から出て別の部屋に入っていくというくらいの意味しかない。人間の本来の本質は後者だから、人間は不滅なのだ。キリスト教で人が死んで永遠の生命に入るというのも、仏教で、死して涅槃に入るというのも、このことを意味しているのだろう。だから、私は死を全く恐れていない」

——そういう認識が一瞬にして生まれたということだが……。
「そうなのだ。瞬間的だった。真理を瞬間的に獲得するとともに歓喜が打ち寄せてきた。その感動で自分の存在の基底が揺すぶられるような思いだった。より正確にいえば、いまことばであれこれ説明しているように、論理的に真理を把握したわけではない。ことばでは表現できないが、とにかくわかった、真理がわかったという喜びに包まれていた。いま自分は神と一体であるという、一体感が如実にあった。それからしばらくして、今度はたとえようもないほど深く暗い絶望感に襲われた。感動がおさまって、思いが現実の人間の姿に及んだとき、神とスピリチュアルには一体であるべき人間が、現実にはあまりにあさましい存在のあり方をしていることを思い起こさずにはいられなかったからだ。

現実の人間はエゴのかたまりであり、さまざまのあさましい欲望、個しみ、恐怖などにとらわれて生きている。自分のスピリチュアルな本質などはすっかり忘れて生きている。そして、総体としての人類は、まるで狂った豚の群れが暴走して崖の上から海に飛び込んでいくところであるかのように行動している。自分たちが集団自殺しつつあるということにすら気づかないほど愚かなのだ。人間というものに絶望せずにはいられない。私の気分はどんどん落ち込んでいった。ところが、またしばらくすると、先ほどの神との一体感がよみがえってきて、感動的な喜びに包まれる。するとまたしばらくして絶望感に打ちひしがれる。こうして無上の喜びと、底知れぬ絶望感と、極端から極端へ心が揺れ動きつづけた。それが三十時間にもわたってつづいたのだ。その

後は、地球への帰還の準備で忙しくなり、忙しさにとりまぎれて、そういうことは考えなくなった。

しかし、地球に戻ってから、この体験を反芻し、哲学書、思想書、宗教書などを読みふけるようになった。もともと哲学、神学に興味をもって読んでいたが、やはりそれまではキリスト教の立場からのものが中心だった。しかし、今度は心をもっと広く開いて、あらゆる宗教、あらゆる思想に偏見なく接するようになった。私が持ったあの神との一体感、あれが特定宗教の神との一体感であって、その神だけが真実の神であり、他の宗教の神は虚妄であるとは私には思えなかったからだ」

——ジム・アーウィンの場合は、あなたと似たような神秘的体験を持ちながら、そこからキリスト教の神こそが唯一の真実の神であるという結論をひき出して、伝道者になったわけだ。

「シムとそう深く話し合ったわけではないが、たしかにジムの体験は私の体験と質的には非常に近いものだったと思う。彼はその体験を伝統的キリスト教の枠組の中で表現している。それが彼にとっては最上の表現方法だったからだろう。しかし、キリスト教の枠組は狭い。あまりにも狭い。あらゆる既成宗教の枠組は狭い。硬化している。既成宗教の枠組の中で語ろうとすると、その宗教の伝統の重みからめとられてしまう。伝統による人間の意識の束縛は大きすぎるほど大きい」——すると、あらゆる宗教の神は、本質的には同じということか。

「そういうことになる。つまり、宗教はすべて、この宇宙

のスピリチュアルな本質との一体感を体験するという神秘体験を持った人間が、それぞれにそれを表現することによって生まれたものだ。その原初的体験は本質的には同じものだと思う。しかし、それを表現する段になると、その時代、地域、文化の限定を受けてしまう。しかし、あらゆる真の宗教体験が本質的には同じだということは、その体験の記述自体をよく読んでいくとわかる。宗教だけに限定する必要はない。哲学にしても同じことだ。真にスピリチュアルな体験の上になちたてられた哲学は、やはり質的には同じものなのだ」

——その質的同一性の本質はどこにあるのか。

「人間的エゴから離脱すると、この世界が全くちがって見えてくる、ということだろう。エゴの目からは見えない知覚の向こうにあるスピリチュアルな世界が見えてくる。自分がこれまで真理だと思っていたことが、より大きな真理の一部でしかないことがわかってくる。この意識の変革、視点の転換がすべてのカギであることを、あらゆる宗教が語っている。イエスが、『悔い改めて神の国に入れ、生まれかわれ』という

とき、意味していることはそれなのだ。ギリシア語で『悔い改め』とは、『メタノイア』という。それに、何か悪いことをしてそれを反省すれば天国にいけるという意味ではなく、世界を全くちがった視点から見れば神的世界がすでにここにあるということなのだ。ヒンズーの伝統でソマティというのも、仏教のニルヴァーナも、あるいは神秘思想という照明体験もすべて同じことなのだ」

——すると、あなたが宇宙体験で得たものも、それが宇宙体験であったが故に得られたというものではないということか。

「そうだ。どんな神秘体験にも引き金になるものがある。私の場合、たまたまそれが宇宙から地球を見るという体験だったということだ。同じ体験を別の人は高い山に登って地上を見たときに得られるかもしれない。私が山の高さではなく、何万マイルもの高みに登らなければ、その体験が得られなかったのは、多分、私の精神がかぶっていた殻が固すぎたからだろう」

——宇宙体験なるが故という要素は別にならないのか。

「こういうことはいえる。神秘的宗教体験に特徴的なのは、そこにいつも宇宙感覚(cosmic sense)があるということだ。だから、宇宙はその体験を持つためには最良の場所なのだ。歴史上の偉大な精神的先覚者たちは、この地上にいてコスミック・センスを持つことができた。これは凡人にはなかなかできることではない。しかし、宇宙では凡人でもコスミック・センスを持つことができる。何しろそこが宇宙だからだ。宇宙空間に出れば、虚無は真の暗黒として、存在は光として即物的に認識できる。存在と無、生命と死、無限と有限、宇宙の秩序と調和といった抽象概念が抽象的ではなく即物的に感覚的に理解できる。歴史上の賢者たちが精神的知的修練を経てやっと獲得できた感覚を、我々は宇宙空間に出るという行為を通して容易に獲得できたのだ。だから私は、私の体験が個人的体験にとどまらず、人類にとって大きな意味があると思っっている。私の体験は人類の進化史における転回点だといってもよいと思う」

——それはどういう意味か。

「人間は宇宙に進出することによって地球生物から宇宙生

物に進化した。人間の地球生物時代は、宇宙生物としての人間の前史にすぎない。前にもいったように、宇宙は創造的進化の過程にある。サルから進化した人類が誕生したところで、進化はその頂点に達し、ストップしてしまったわけではない。人類の時代になってから、進化は人間の意識の拡大という面で急速に進んできた。そしていま、宇宙生物となり、コスミック・センスを獲得するようになった。ここから人類の新しい時代がはじまる」

——壮大な進化論だが、その進化はどういう方向に向かっていくのか。

「進化の方向ははっきりしている。人間の意識がスピリチュアルに、より拡大する方向にだ。つまり、イエスとか、ブツダとか、モハメッドとかは、早くからこの進化の方向を人類に指し示していた先導者なのだ。どんな進化でも、種全体が大きく変わる前から、進化の方向を先取りして示す個体があるのと同じことだ」

——つまり、未来の人類は誰でも、イエスらのように高度にスピリチュアルな人間になるといふことか。

「そういうことだ。そして、この宇宙をより正しく、つまり、よりスピリチュアルに理解するようになる」

——あなたの進化論は、ティヤール・ド・シャルダンのそれに非常に近いように思われる。

「その通りだ。ティールからは大きな影響を受けている」——しかし、ティヤールは進化のたどりつく究極点であるオメガにキラスを置いた。そこはあなたとちがう。

「その通りだ。ティヤールはキリスト教の枠組の中にいた。

私も進化の方向は、神との同一性に無限についていく方向にあると思っているが、私の考える神は、キリスト教の神ではない。ちなみに、ユングからも私は影響を受けている。人間が集団的無意識を共有しているという彼の考えは正しいと思う。しかし、その集団的無意識の根拠は人間が原始時代から蓄積した経験の集積に求められるべきではなく、エゴから離れた意識の面においては、すべての人間がそれぞれに神につながっているのだということに求められるべきだろうと思う」——その神が、精神であり、知性であり、思惟であるというとき、そのイメージがもう一つつかみにくい。

「それはそうだろうと思う。我々の意識が伝統的なもの見方に縛られてしまっているからだ。天動説を信じ込んでいた人々は、コペルニクスが地動説をとなえたとき、それをイメージすることができなかった。この不動の大地が動いているだって、バカなことというなと怒ったのだ。

地球が平面であることを信じきっていた人々は、地球が球体であるという説を聞いたとき、地球が球体なら、地球の下側にいる人がなぜ落ちないのか、どうしても理解できなかった。

私がよく用いるたとえ話でこういうものがある。地球が平面で、その上に生きている人間も、二次元の生物であったとする。三次元の物体は、彼らは見たことも考えたこともない。そういうものが存在することすら知らない。そこに、宇宙からヤリが飛んできて、地球を貫いたとする。地球人はそのとき、ヤリを三次元の物体として認識できるか。地球人は二次元の生物だから地球平面上にはないヤリの三次元の部分が見えない。従って、ヤリを円柱状の細長い物体とは思わず、平

面上の小さな円としか思わない。宇宙のスピリチュアルな構造を知らず、それをマテリアルの側面からしか見ない人は、二次元の世界に生きているが故に三次元の世界が見えず、見えないが故にそれが存在しないと思っっている二次元地球人のようなものだ。

あるいはこうもいえる。我々現代人はみなインシュタインの理論を一応は知っている。時間と空間は絶対的なものでなく、相対的なものであるという相対性理論を常識として知っている。しかし、それをイメージとしてつかんでいる人間がいるだろうか。人間がイメージできる世界は、依然としてニュートンの世界にとどまっている。現実の知覚の対象として入ってこなければ、人間にはイメージがわくものではない。

宇宙時代に入って、ようやく人間はほんのチラツとだけインシュタインの世界を現実にかいま見るようになった。しかし、それが一般的にイメージされるようになるのは、まだまだ先のことだろう。イメージできなくてもわかればよい。インシュタイン自身、自分のとなえる世界像をどれだけ具体的にイメージできていたかは疑問なのだ。しかし、イメージできなくても、彼は理論を作ることができ、その理論を通して人間の意識の地平を一挙に拡大した。そして、これまでのニュートンの世界を構成していた概念とそのイメージの関係を徹底的に破壊した。物質、質料、時間、空間、エネルギーなどなどに関して我々がいだいてきたイメージは、その概念が真に意味するところのものほんの一側面について作りあげたイメージでしかなくことを暴露したわけだ。では、それに代る真のイメージがあるかといえ、ない。

より深い認識にすすむと、プリミティブな認識では有効であったイメージが有効でなくなる。神についても同じことだ。プリミティブな認識にはそのイメージがあつたらうが、より高次の認識ではイメージが成り立たなくなる。面白いのは、物質的世界の理論をあくまで追究していったインシュタインが晩年になって、宇宙は機械仕掛けの物質というよりは、むしろ一種の思惟のごときものではないかと考えるにいたつたことだ。物質に対するより深い認識を求めていくうちに物質観がどんどん変貌し、ついにそこまでいたつたわけだ」

——あなたの神がそうしたものであるとすると、宇宙のはじめはどうだったのか。人格神でないなら創造神でもなかったらう。人格神の存在を支持する人々の根拠は、「はじめ」の問題にある。はじめは誰かがこの宇宙を創造したにちがいないと考える。

「『はじめ』はわからないというほかない。誰にもわからないだろう。神秘体験によって神との合一体験を得た人にすら、ほんとのところは、『はじめ』はわからないだろう。あるいは、『はじめ』というのは、そもそもなかったのかもしれない。『はじめ』があるはずだというのは、誤れる前提かもしれない。この問題は時間の概念と関係がある。時間が、古典的なニュートンの世界像にあるような、絶対的なものであるなら、『はじめ』を考えなければならぬのかもしれないが、いまでは、時間というものがかって考えられていた以上に、相対的で、フレキシブルであることがわかつていく。私はまだその答えを得ていないが、時間の解釈によって、『はじめ』の問題は解消するのではないかと思っっている」

宇宙からの帰 還立花隆